

## 徳川宗春側室阿薫の出自

大野 健

### 一・はじめに

尾張藩七代藩主徳川宗春は、幕府の儉約令に背いた開放政策で享保から元文にかけて名古屋に空前の活況をもたらした。鼈甲笠に緋の召物、白牛の背に揺られ長煙管をくゆらす所謂「派手好き」の宗春は、多くの側室を持ったが終生正室を定めなかった。正室を定めることは制度ではないが、高貴な出自の伴侶を得ることにより一層の権威付けを図る手段ではあった。見栄えに気を配り、大胆な行動力のあった宗春が正室を迎えなかった理由を考察したことが本稿の発端である。

八年余りの治政の後、宗春が閉門蟄居となった後、六名の側室の行方を『金府紀較抄』が記している。江戸下屋敷に部屋を得た者、親元に戻された者、宗春の母宣揚院の預かりとなった者、と様々だったが、終生宗春と共に暮らした女性は、ただ一人。その名を「いつみ」といった。

この側室「いつみ」が本稿で取り上げる阿薫である。彼女の死後には『阿薫和歌集』が編まれた。その跋文

に「容儀すぐれて婦徳をおさめ小星の光おはす……」と記され、生年月日や父母など出自が明確に綴られているのだが、筆者は敢えてこれに疑義を呈し、読者の賢明な判断を仰ぎたい。

## 二・御三家正室の家格

尾張藩主の部屋住みの弟たちは、当主に万一のことがあれば、宗家を相続し御三家当主に相応しい正室を迎えなければならず、支藩など家を持つ前に迎える妻は、必ずしも身分の高い家柄というわけではなかった。宗春の兄の継友は、藩主となってから摂家の近衛家の息女を迎えた。

一方、早くから相続が見込まれていた四代藩主の吉通の正室も同様に摂家の九条家の息女である。

紀州家はどうかろう。四男の吉宗は紀州藩主となつてから伏見宮の女王を正室に迎えている。その父で二代藩主光貞の正室も同じく伏見宮の女王である。

御三家の序列では家康の九男義直を祖とする尾張の方が十男頼宣を家祖とする紀州より上なのに、正室の家格では逆転していた。結局、八代將軍選びの際、昔の長幼

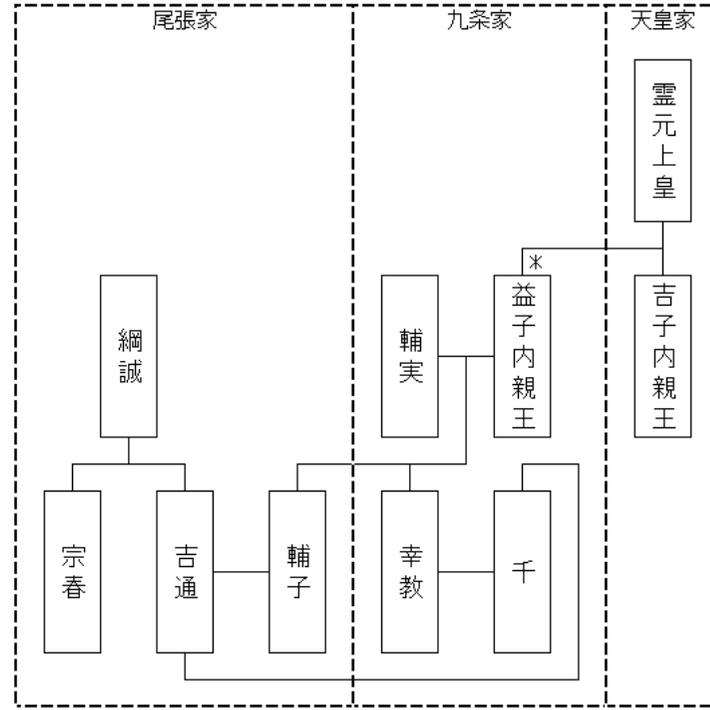
の序に安住していた尾張は、政略結婚で家格を上げていった紀州に敗れた。もちろん理由は他にもあっただろう。御三家で上位なのだから宮家より上位の家から正室を迎えて何が悪いものか、と派手好きな宗春なら考えたのではなかろうか。皇子の娘である女王の格上となると天皇の娘、すなわち皇女となる。

筆者は、享保十六（一七三一）年に適齢の皇女を探してみた。中御門天皇の第一皇女は、まだ十一歳。先代の東山天皇には存命の皇女なし。さらに一代遡った靈元上皇（仙洞殿）の皇女を探したところ、ただ一人、十八歳独身の内親王が見つかった。靈元天皇第十三皇女八十宮である。二歳にして幼將軍家継と婚約し徳川への初の降嫁が企図されたが、翌年、相手の早逝で破談になった政略婚の悲劇の皇女として名高い。五年前に親王宣下が済み吉子内親王となっていた。

慣例として皇女の母が女御以上か、宮や摂家に嫁ぐ場合にのみ親王宣下がなされる。母松室敦子は中臈で最初の条件に当たらない。とすると親王宣下当時、靈元院は、八十宮を出家させるのではなく再縁させようと考えていたものと推定できる。

### 三・吉子内親王と尾張家

先に述べたように宗春の兄の吉通の正室の瑞祥院（輔姫）は、九条家から興入れした。その母益子内親王は、後西天皇の第十皇女で、靈元天皇の猶子となつて九条家に嫁



\*後西天皇の第十皇女、靈元天皇の猶子となり嫁す ( 図 1 )

いだ。即ち益子は、吉子と姉妹。吉子は、宗春から見れば兄嫁の叔母に当たる。さらに九条家には吉通の娘の千が嫁いでいるから宗春の姪の叔母でもある。靈元院に縁組を申し入れる筋は、十分に整っていた。  
 以下に享保十六（一七三一）年から翌年にかけての経過を追ってみる。

官位叙任の御礼のために、享保十六年正月に尾張家重臣渡辺半蔵、同三月に鈴木明雅が上京<sup>\*1</sup>しており、縁組の交渉機会はあったと思われる。

当時の九条家の状況はかなり心細いものだったろう。千の夫君の内大臣幸教、その父で摂政、関白も務めた輔実が相次いで亡くなり、幸教の遺児植基は未だ七歳と幼かった。

尾張家重臣らから九条家の苦境が宗春に報告されたのだろう。「享保十六年八月 京の九条殿本殿修復着手、宗春より三千両ほど寄付<sup>\*2</sup>」された。時期と筋からして宮中への働きかけ工作に対する返礼とも見える。

相手の死によって婚約破棄となった姫の再縁は高貴であるほど難しい。婚約者の相次ぐ死で興入れが遅れた養女竹姫の縁組で苦勞した將軍吉宗は、それを知っていたはずだが、吉子を將軍家に迎えることはなかった。嫡男家重には享保十六年十二月、父祖同様に伏見宮の女王が興入れすることになっていたからだ。

一度は徳川家と縁づいた皇女であり、兄筋の將軍家が貫わぬというのなら弟筋の尾張家で正室として迎えますよう、というのは人道に沿っているといえよう。

ただし、実現すれば次期將軍の正室が女王なのだから、新たに逆転現象が生じる。それが新たな諍いの種となれば、その矛先は朝廷に向けられること必至だから、晩年

の靈元院は尾張への興入れには慎重であつたろう。

享保十七年の正月、京四条では宗春の姿を写した歌舞伎「傾城妻恋桜」が大当たりした。同時期に珍しく靈元院は吉子邸へ御幸している。

同年八月に靈元院が崩御。吉子内親王は、二月後、落飾した。

親の死で子が出家するというのも奇妙な話である。夫君の死に際し落飾するならまだ分かるが、吉子の母である松室敦子が落飾したという史料も見当たらなかった。院の崩御と出家の間に二月余りあることから察するに自らの意志ではなく、崩御を契機として出家させられたように思われる。

以上を年譜にまとめる。

▼ 享保十五（一七三〇）年十一月 通春が兄の遺領を相続し尾張家七代となる

▼ 享保十六（一七三一）年正月 万石以上格の渡辺半蔵綱保が京に上り、位記・宣旨・口宣案を賜り、参内のうえ、朝廷にお礼<sup>\*3</sup>

▼ 同年三月 年寄鈴木明雅が中御門天皇、靈元院と昭

仁親王に参議昇進のお礼<sup>\*4</sup>

▽ 同年八月 九条家へ三千両寄付<sup>\*5</sup>

▽ 同年十二月 家重と伏見宮女王との婚儀

▽ 享保十七（一七三二）年正月 京四条で「傾城妻恋  
桜」上演<sup>\*6</sup>

▽ 同月 吉子内親王御所へ靈元院が御幸<sup>\*7</sup>

▽ 同年八月 靈元院崩御

▽ 同年十月 吉子内親王出家<sup>\*8</sup>

### 三・阿薫和歌集跋文への疑義

本人の死後に冷泉宗家、為村、為泰といった歌の上手の添削による四千二百首が編まれた「阿薫和歌集」は、鶴舞図書館河村文庫（以降「河村本」）と蓬左文庫の蟹江慶次郎旧蔵書（以降「蟹江本」）にある。蓬左文庫には別に河村本の写本（昭和九年）がある。

河村本の伊藤将親による跋文の冒頭を以下に引用する（改行および句読点は筆者による）

宝泉院阿薫芳負禅定尼諱は華子和泉と称す。猪甘氏にして其先近江の人成り。はじめ織田家につかへ、のち豊臣の家臣と成り、両家滅亡の後、都に出て代々

処士たり。父を宗貞といふ。母は鈴木氏。正徳五年乙未三月十六日に父の家に生れ給ふ。享保十七年壬子十月、章善院殿の殿内に入給ふ。尼公容儀すぐれて婦徳をおさめ小星の光おはす。公御国務の時より位遁れ給ふ後まで左右に侍りて采繫の助けまします。戴公殊に其労を賞し意を給ひ品秩およそ夫人の礼に准じさせ給ふ。今の殿に成りても厚遇亦同じ・・・

阿薫の諱は華子、和泉。家は猪甘<sup>いかい</sup>氏、近江の出で織豊の家臣だったが後は都で代々浪人だった。父は宗貞、母は鈴木氏の出。正徳五年に生れ、享保十七年十月に章善院（宗春）の側室となった。容貌優れて、徳があり、きらりと光るものがある。宗春が藩主であった時から隠居の後まで側にあり夫人としての務めを果たした。宗勝は特にその労を賞で正室同様に遇した。宗睦も同じく厚遇した。

隠居後も側室の中でただ一人連れ添った特別な側室であつたことを語っている。

婦徳があり、和歌を好み、正室同様たりえたという部分は、実際に和歌集があることからもある程度信頼でき

るが、出自の部分は疑わしい。

近江の猪飼氏といえは明智光秀に従った堅田の土豪を想起させる。江戸時代に南近江の代官として仕えた家もあつたが、宗貞は代々牢人だったという。代々牢人の家で婦徳と教養のある女性が育つとは俄かには信じがたい。

後のことになるが、この猪飼（猪甘）姓は、宗春の菩提を弔う無量寿院の尼住職が代々名乗った<sup>\*</sup>。姓であることをここで付言しておく。

武家諸法度は、一万石以上の大名が私に婚姻することを禁じ、公家との婚姻は、奉行所に届け指図を受けよ、との附則がある。公家を名乗れば詮索され、関ヶ原の勝者側の武将の末裔とすれば、同族に照会する者が現れるかもしれない。織豊側の牢人としたのは、素性の探索を逃れる意図があつたのではなからうか。

もつとも注目すべきは奥に入った年月である。享保十七年十月――これはまさに吉子が落飾したとされる年月と一致する。

因みに吉子が正徳四（一七一四）年八月二十二日生まれなので、阿薫は七ヶ月ほど年下ということになる。

果たして、京から来た阿薫は、吉子の出家と関連があ

るのだろうか。阿薫に仕えていた官女だったのか？

結論から先に言えば、阿薫は、吉子本人であったと筆者は考えている。即ち、出家したのは他の誰かで吉子本人は敢えて側室として宗春の後宮に入ったのである。

俄かには信じがたいことかもしれないが、こう仮定すると奇異に見えた宗春の行動にも合点がいく。

ひとつは、正室を迎えず、定めようとしなかったこと。阿薫を正室と定めれば出自を厳しく詮索されるだろう。この上ない室を迎えた以上、その上の出自の室などを求めるべくもない。

さらに、乾御殿の造営も以下のように理解できる。

#### 四・乾御殿の意図

乾御殿の建設は宗春の失政の一つに数えられる。

当主の住まいとして二之丸御殿があり、先代継友が棄却した下屋敷を新築したばかりなのに、なぜさらに御殿が必要だったのか。そして、どれほどの規模だったのだろうか。

『金府紀較抄』享保二十（一七三五）年の記事を引用

する。

去丑年末広町下の切西側 若宮より下 表口三間の家御買上に成 御慰所出来 已後両隣へ広がり表口拾式三間の家 女中も大分集り候処 当春御上国已後 右の家不残崩し 表裏共板囲に成 右之御見物所之替として 当秋中下西御屋敷之内御殿出来致 是も御下屋敷同前之御作事に而是を乾御殿と云

享保十八（一七三三）年に落成したいわゆる「此の国屋」を享保二十（一七三五）年春に取り壊して、乾御殿の建物部分が同年秋にできた、という。おそらく部材を流用したのだろう。

まず、乾御殿の場所を考えてみたい。

『金城温故録』は、乾御殿を西御深井の最初の御殿だとする。同書が西御深井を「御深井御庭曲輪外の方、西に当れる地」とするのはまさに城から北西で乾という名前に相応しいが、中下からは北方に離れている。また、「享保十四酉年名護屋絵図」<sup>\*1</sup>をみても当該地に御殿地に

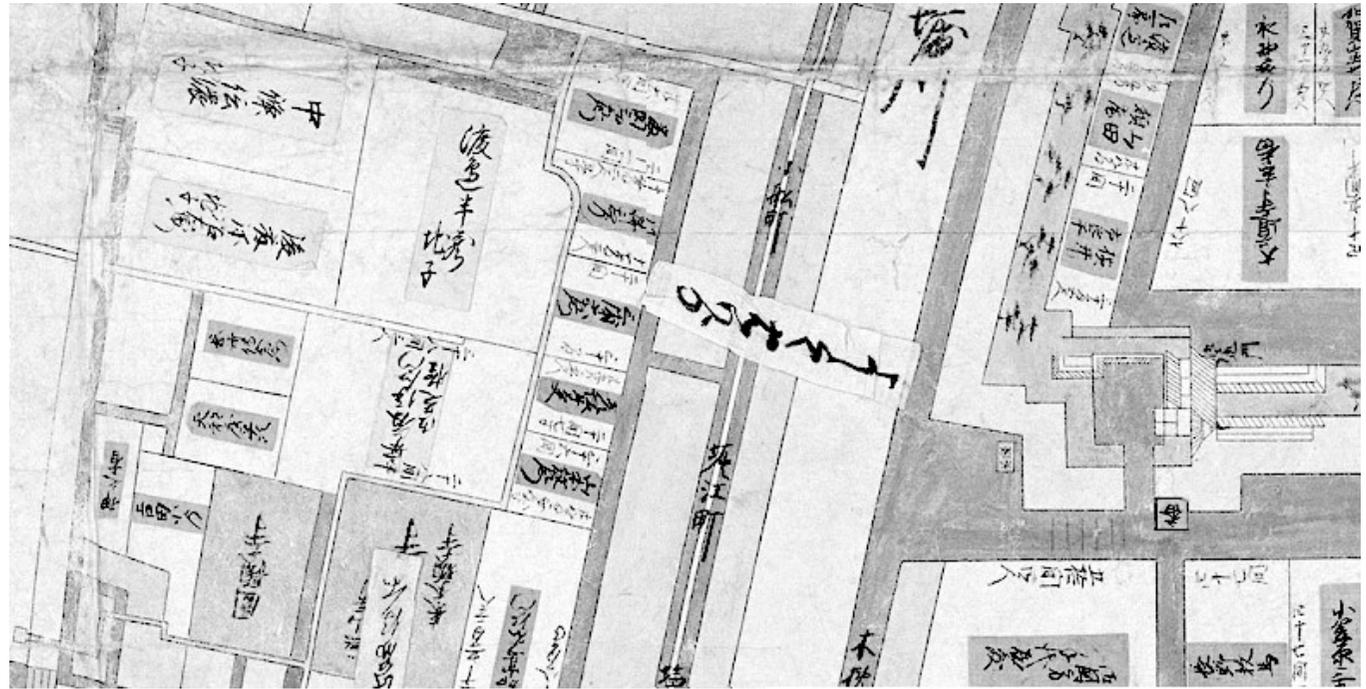
相応しいまとまった地所は見当たらない。

同地図の中下あたり（図2）を探すと円頓寺の北に家臣の領地がある。渡辺半蔵、中条信濃、後藤弥次右衛門の領地を併せると同地図上で名古屋城本丸ほどの広さになる。さらに遡れば尾張支藩高須家の屋敷地であったこと<sup>\*12</sup>を考えると地勢も良かったものと思われる。

『稿本藩士名寄』の星野織部の記事に「享保十九年十月十八日 中条金四郎<sup>\*13</sup>江御預之中下年貢地屋敷御引上織部扣屋敷被下置」とある。『夢之跡』<sup>\*14</sup>では、「巾下日置<sup>2</sup>川並辺中屋敷等建之」と織部の中屋敷を建てたとするが、乾御殿の一部としたのかもしれない。

渡辺半蔵の領地は、後に宗春の四女頼君の屋敷地となり宝暦十（一七六〇）年まで屋敷があった。後に「御姫様屋敷」と呼ばれ、「比米町<sup>めまち\*15</sup>」という地名の元となった。歴代藩主の姫が住む丸の内から離れた屋敷に他ならぬ宗春の娘が住んでいたとなると、当該地が乾御殿の一部であった可能性は極めて高いといえよう。

次に御殿の内容だが、『夢之跡』によれば、屋敷の庭には築山や寺社を造り、木・草花を吟味して元文二（一七三七）年に至るまで時間をかけて多くの草木・石・竹が



運び込まれ、菊畑もあつたというから、『金府紀較抄』の伝えるとおり江戸戸山の下屋敷や名古屋下屋敷のような回遊式大名庭園が企図されたと考えられる。

下屋敷があるのになぜ同様の御殿を必要としたかを明確に説明できる者は居なかったから、無駄な浪費に見え批判があつたのだろう。

乾御殿は阿薫、すなわち吉子内親王のために造営されたと筆者は考える。

將軍の息女を正室に迎える大名家は、守殿を新たに造営したものだ。ましてや皇女を迎えるのだから新御殿を建てるのは当時の常識であつただろう。

理由を明らかにできない宗春の胸の内はいかばかりだったろう。

阿薫Ⅱ吉子説の外堀は埋まった感があるが、ここまでは状況証拠ばかりではある。

実際に縁組に動いたのは家臣だったのだから、阿薫の正体を知る者は必ずいたはずだ。

## 五・阿薫和歌集序文の暗号

知っている秘密を伝えたいのだが、あからさまに伝え

ることができないとき、人はどのようにメッセージを残すのだろうか。

阿薫の出自については先に挙げた跋文に詳しいのだが、阿薫和歌集には真名序がある。

筆者は、当初、衣そと通おり姫ひめや小野小町に言及する冗漫な真名序を軽視し存在意義を認めていなかったのだが、ぼんやりと「ながめて」いた時にそれに気づいた。

序文の作者は岡田挺之。別名を新川、仙太郎という儒者である。元文二（一七三七）年に生まれ、松平君山に学び、天明三（一七八三）年藩校明倫堂の教授となり、寛政四（一七九二）年には督学となり、歴史編纂所継述館総裁もつとめた<sup>\*16</sup>。

冒頭部分を河村本からそのまま引用する。

三十一字之製猶如唐詩之有律絶也矩矱一定  
不復可易蓋自衣通姫居三神之一小野氏預六  
仙之班工是製者多出女流亦以其織麗之辭與  
洞房窈窕之人相宜乎阿薫集者寶泉夫人所製  
也夫人猪飼氏諱華子家于平安選入

章善公後庭有寵

公薨夫人下髪為尼守節終身性好讀書工干臨

・  
・  
・

一行を十九文字に揃えて書かれ、宗春を表す「章善公」と「公」を平出にして改行している。因みに河村本の写本（昭和九年）は、一行の文字数に拘りなく文字のみを写している。

和歌三神の一人である衣そと通おり姫ひめと六歌仙の一人である小野小町とを挙げ女流歌人が才色兼備であったことから阿薫あい宝泉院へと書き繋いでいる。出自情報はあっさりとして「猪飼氏、諱は華子、家は平安（京）」と書くのみだ。

文に別の意味を隠すことは、七文字ずつ区切って末を読むと「咎無くて死す」と読めるいろは歌や伊勢物語のかきつばたの折句が有名だが、漢詩にも折句のようなものがあり蔵頭詩というらしい。この序文は漢詩ではないが、大切なメッセージを蔵している。

読者諸氏はもうお気づきだろうか？ 頭文字を右から左に辿ると「仙洞也」と読める。仙洞御所は、京都御所に隣接する上皇の住まいで、吉子の出生地である。仙洞様

は、永らく吉子の父靈元院を表していた。挺之は、こっそりと日記に残すのではなく、大胆にも阿薫の和歌集の序文にその出自を隠していたのだ。

念のために蓬左文庫の蟹江本の序文と校合したところ、引用した部分では最後の行にのみ異同があった。

公薨（河村本）

公捐館舎（蟹江本）

「公」は章善公（宗春）を指す。すなわち宗春の死を表す表現が異なっている。

序文にある天明五（一七八五）年時点では宗春の謹慎処分は継続していたから、阿薫和歌集の正本では貴人の死に用いる敬語を避けて「捐館舎」が用いられたものと考えられる。河村本は、永らく宗春の近くに仕えた河村復太郎（秀根）が書写した際、御三家当主だった人の死に相応しい敬語の「薨」に書き直したものと考えたい。従って、蟹江本とはこの行以降で改行にずれが生じている。

なお、紙が劣化して虫食いも多い河村本に対し、蟹江本は紙が薄く文字も整って気品を感じる。先に指摘した点からもおそらく蟹江本が正本に忠実な写本であるか、

あるいは十八巻作られた正本の一つであろう。

未だ赦されていない宗春の側室阿薫が皇女であったと書き残すことは当然憚られた。それでも岡田挺之は、端的に吉子の出自を示す三文字を選び出し、工夫を凝らして平出のない冒頭部分の頭字に蔵した。

元文に生れた挺之は、自ら縁組に関わったわけではないのに、なぜ苦心してこれを伝えようとしたのか？

残念ながら利害関係はみつからなかった。しかしながら、表立っては記せない状況下で、何とかして真実を伝えたい、との想いはそれだけで立派な動機ではなからうか。歴史を研究する者なら共感していただけることと思う。六歌仙と書かず「六仙」としたり、艶めかしさが漂う「洞房窈窕」を敢えて使ったりして頭文字を無理矢理合わせた違和感は、逆に気付かせるための挺之の狙いだっただのかもしれない。

もちろん、筆者は、これが偶然の文字の並びという可能性を否定するつもりはない。浅学ゆえに偶々「ながめて」いて気付いたに過ぎない。阿薫和歌集本文や岡田挺之、書誌学の見地からも今後の研究が進展することを心から期待する。

## 六・むすび

尾崎久弥氏は『徳川宗春年譜』のあとがきで無量寿院の江戸期の住職について「京都から某宮家の姫を住職として代々迎へ、また尾張家上女中の隠居所でもあり、長屋があつて別当も住み、住職は駕籠で登城したと。(駕籠が用意されたのは、この寺の性質として当然。)」と記している。出典は不明だが、次に住職の戒誠尼との会談の様子が書かれているから、寺に伝承された話であつたのかもかもしれない。

当時、皇女の嫁ぎ先は宮家と五摂家しかなかった。意を決し降嫁した吉子を前にして、当初、家格を上昇させるための政略結婚を目論んでいた宗春は、深く恥じたことだろう。そして、名を捨てて実をとつたのだ。運命に抗い内親王の身分を捨てて敢えて側室として嫁した女と、それを敢えて一人の女として迎えた男。イエ制度の束縛を離れた個人の意志による婚姻であつた。

\* 1 白根孝胤「徳川宗春の家督相続・官位叙任と幕藩関係」(『近世名古屋享元絵巻の世界』二〇〇七年 清文

堂出版)

\* 2 尾崎久弥『徳川宗春年譜』一九五七年 名古屋市  
経済局

\* 3 \* 1 に同じ

\* 4 \* 1 に同じ

\* 5 \* 2 に同じ

\* 6 『歌舞伎年表』(一九七三年 岩波書店)に外題なしで「京、小六座、二の替り。八重桐引込みしも、助五郎踏止まり、二の替大当。牛にのった絵人形等、助五郎の姿を写して諸国まで弘ひろまる」とある。

\* 7 「院中番所日記」「仙洞女房日記」(『靈元天皇実録』二〇〇五年 ゆまに書房)

\* 8 「御系譜」(『靈元天皇実録』二〇〇五年 ゆまに書房)

\* 9 \* 2 の「あとがき」

\* 10 『尾藩世紀』享保十六年七月に「又先代毀たれたる下邸、再興せらる」とある。

\* 11 愛知県図書館蔵

\* 12 『名古屋城下図』(元禄年間)名古屋市史編纂史料

\* 1 3 中条信濃の二代後の康篤

\* 1 4 名古屋市史編纂資料

\* 1 5 『名古屋市史地理編』一九一六年

\* 1 6 『講談社デジタル版 日本人名大辞典 + Plus』

(おおの・たける 歴史小説作家)